２０１１／０１／１６　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　牧師

主　　題：ギメル：神のことばと敬虔な者の祈り
聖書箇所：詩篇　１１９篇１７－２４節

詩篇１１９篇をお開きください。
私たちの人生、私たちの生涯には困難があるものです。それを否定出来る人はだれもいないだろうと思います。私たちはいろんな時に楽な生涯を歩むことが出来るのではないかと考えますが、現実はそうではありません。事実、だれ一人として、私たちが生きて行くに当たって、「そこには何の問題もない。問題など起こらない。」と保証できる人はだれもいないのです。そんなことをした人もいません。私たちの国、この日本には不名誉な記録が今も続いています。不名誉と言うよりも、非常に悲しい記録です。昨年一年間、またしてもこの国には自殺者が３万人を超えて存在しました。もう１３年連続３万人を超えています。自ら命を絶った多くの人たちは、自分たちの人生がおもしろおかしく楽なものだったから命を絶ったのではなかっただろうと思います。むしろその逆で、彼らが抱えていた生涯は余りにも重く困難であり、そこに喜びも希望も見出すことが出来なかったゆえに、自ら命を絶つという悲しい選択をされたのだろうと思います。
信仰者の生涯も余り変わりありません。未信者の方とお話をすると、ときに、信仰をもったらすべてが上手く行くかのように考えている人たちがいます。私はその都度、その人たちに「クリスチャンになったら益々辛い生涯が待っていますよ。」とお伝えします。なぜなら、パウロが私たちに教えるように、もし、私たち人間が神の前に敬虔な生涯を歩んで行こうと願うならば、そして、そのように歩むならば、そこには必ず迫害があるからです。人生の中に起こって来る様々な問題は、ときに私たちをパニック状態に陥れます。処理し切れないと思う問題がたくさん私たちの上に積み上げられて行きます。それは私たちを落胆させ、私たちを悲しませ、ときに、それらは私たちを怒らせ、また、それらは私たちを無気力にします。そのようなことはありませんか？余りにも問題が大きくて、悲しみの内に沈んでしまって、そこから抜け出すことが出来ない人たち、いろいろな人たちから余りにも酷い仕打ちを受けるゆえに、怒りに支配されて人生を過ごしている人たち、また、問題の難しさに、その大きさに愕然として何もする気がなくなってしまった人たち…。残念なことに、今日、この世だけでなく教会の中にもそのような人たちを多く見受けるのです。自分たちの生涯を生きるに当たって、その人生に平安も喜びもすっかり枯れ果ててしまった人生を生きている人たち。
私たちはどのようにしてそのような落胆に打ち勝つことが出来るのでしょう？希望が全くないと思えるような状況の中で、私たちはどのようにして希望を見出して生き続けることが出来るのでしょう？感情的な破綻へと向かって真っ逆さまに落ちて行くような状況、状態から、私たちはどのようにして私自身を守ることが出来るのでしょう？私たちはどうすればそのように全く希望のない絶望の生涯の中に虜にされている人たちを助けることが出来るのでしょうか？多くの手法、多くのアイディアがこの世にはあります。そして、それらのアイディアは教会の中にも多く入り込んでいます。今上げた質問に対する答えが、いろいろな所に余りにもたくさんあるゆえに、私たちはいったいどれを信頼して、どれに頼ってその回答を見出すべきなのかが分からなくなるようです。たくさんの説が上げられて、たくさんの手法が講じられているからです。
今日、私は皆さんにその答えをもって来ました。安心してください。それは私の答えではなく、私が勝手に考え出したものではなく、神が私たちに教えてくれることなのです。著者がこの詩篇１１９篇を通して、私たちにこの様な人生の様々な困難の中にあって、どのように喜びをもって希望をもって、絶望することなく、打ちひしがれることなく、落胆の極みに達することなく生きて行くことが出来るのか、その方法、その答えを与えてくれています。私たちは神のみことばに答えを見出すことが出来るのです。実際に、非常な危険な状態に置かれていたこの詩篇の著者、彼はこの詩篇１１９篇の第３区分、１７－２４節まで、「ギメル」というヘブライ語の３番目のアルファベットの文字を使って、私たちに彼の「祈り」を教えてくれます。その祈りの中で、この著者は神に四つの具体的な願いをしています。これらの四つの願いの中に、私たちは、どうすれば自分たちの心を喜びに満たしてこの生涯を歩んで行くことができるのかという、その秘訣を見ることが出来ます。この著者の祈りは、私たちに神のみことば、神と神のみことばが、私たちが専心すべきものであり、それが私たちの願いであり、願望であり、私たちの方向であり、行くべき道であり、私たちを守るものであることを教えてくれています。
これらのことを完全に正しく理解し、それらを自分たちの生涯に実際に取り入れて行なって行くなら、

私たちは人生の様々な困難の中にあって、神に喜ばれる態度をもって生き続けることが出来ることを、この著者は私たちに教えてくれるのです。ですから、今日、皆さんといっしょにそのことを学んで行きたいと思います。神のみことばのすばらしい真理をいっしょに見て行きたいと思います。彼の祈りをお読みします。　**詩篇１１９：１７－２４**

119:17 あなたのしもべを豊かにあしらい、私を生かし、私があなたのことばを守るようにしてください。
119:18 私の目を開いてください。私が、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。
119:19 私は地では旅人です。あなたの仰せを私に隠さないでください。
119:20 私のたましいは、いつもあなたのさばきを慕い、砕かれています。
119:21 あなたは、あなたの仰せから迷い出る高ぶる者、のろわるべき者をお叱りになります。
119:22 どうか、私から、そしりとさげすみとを取り去ってください。私はあなたのさとしを守っているからです。
119:23 たとい君主たちが座して、私に敵対して語り合ってもあなたのしもべはあなたのおきてに思いを潜めます。
119:24 まことに、あなたのさとしは私の喜び、私の相談相手です。

著者はこの第３区分＝ギメル＝、この区分にあって「神に対する祈り」を書き記し、私たちに教えます。ここには四つの願いがその祈りの中でなされています。

☆神への祈り

１．神と神のみことばに専心、献身している　　１７節

１７節に見る祈りは「神さま、どうぞ、私があなたに専心して生きて行くことが出来るように」です。彼が言わんとしていることは、神と神のみことばこそが、私たちが専心していかなければいけないもの、献身をもって生きて行かなければならないものだということです。日本語の聖書では、ここには三つの願いが記されているかのように読んでしまいます。**「あなたのしもべを豊かにあしらい、私を生かし、私があなたのことばを守るようにしてください。」**と。でも、実は原文では、そして、より正しく訳すなら、ここには一つの祈りと目的が書かれているのです。直訳すると「あなたのしもべを豊かにあしらってください。そうすれば、私は生き、あなたのことばを守るようになるからです。」。ずいぶん違いますね。原文では祈りは一つしかないのです。

１）著者の祈り

ここで著者が祈っていたことは、神が彼に対して豊かに接してくれるように、優しく気遣い、心遣いをもって彼の人生に働きかけてくれるようにというものでした。この祈りは、この詩篇で見ることが出来るように、実際に、敵と直面していた著者の危険な状況の中で祈られたものです。後でもう少し説明しますが、２１節や２３節には敵の姿が記されていますし、この詩篇１１９篇の全体を見ても、著者は何度も彼の身に様々な危険があったことを私たちに告げます。それゆえに、この「神さま、どうぞ、私を豊かにあしらってください。」という願いは、彼自身の危険な状態から私を助け出してくださいという願いであったと言っても構わないと思います。

皆さんに注目していただきたいのは、彼がここで初めて、自分のことを「私」ではない表現で呼んでいることです。彼は**「あなたのしもべを」**と言います。この表現は１１９篇の中に１４回登場します。このことばを使うことによって、著者は神であり主人である神に対する忠誠と従順を表現するのです。明らかに、著者と神との間には関係があったのです。神が自分の主人であり、主であり、自分はその方のしもべ、または、奴隷であると言うのです。この関係は、彼が神が命じることを守らなければならない、いや、守る存在であるということに基づいているのです。そして、自分が神のしもべ、奴隷であることを認めている、そのことを良く理解しているこの著者は、自分の主人に対して「私はあなたのしもべだから、どうぞ、私に対して豊かに働いてください」と祈るのです。彼は神に信頼を置いています。様々な困難が具体的に起こっているときに、神が彼に対して優しく、彼のために働きを為してくださることを信頼して、神に祈るのです。「どうぞ豊かにあしらってください。」と。

２）目的

でも、注目すべきことはその祈り自体ではありません。何のために彼が祈ったかということです。この祈りが叶えられたときにどのようなことが彼の人生に起ころうとしているのか、そのことを見たときに、彼が何を願ったのかを本当に知ることが出来ます。後半部分でこのように言います。「そうすれば、私は生き、あなたのことばを守るようになるからです。」と。これは結果、または、目的を表わしています。

（ａ）「生きる」

初めに「そうすれば、私は生きる。」と言います。確かに、この文脈を考えたとき、敵の様々な攻撃から守られて、自分のいのちが永らえるということを言っているのだろうと思います。ただ、著者はこ

こで「生きる」という特定のことばを使うことによって、生きる生涯が細々とギリギリの状態で生きるということではなく、生命力豊かにすばらしさに満ち溢れた状態で生きるという、そのようないのちのことです。彼は単に危険から逃れることだけではなく、神に豊かにあしらわれることによって、危険から守られ、その生涯は主の前に益々霊的に豊かなものであり続けるということです。

（ｂ）「神のみことばを守る」

神がそのように働きかけてくださるときに、彼の人生は守られ豊かになるだけでなく、それは「あなたのことばを守るようになる」と言います。皆さん、私たちが神に「どうぞ、私を豊かにあしらってください。」という祈りをするときに、私たちが考えていることは「そうすることによって、私たちの生涯が豊かになりますように、」ということではありませんか？「私たちが安らかに過ごすことが出来るようにしてください」ではありませんか？私たちは実は、祈りつつ願っていることは、自分たちの願望が神によって満たされるようにということです。

私たちは祈るときに、まるで、自分たちが主人で神が私たちのしもべあるかのように祈ることがあります。私はよく祈りの話をするときに、ランプの精の話をするのですが、主人がランプを擦るとランプの精が出て来て「ご主人さま、あなたの願い事を叶えさせてください。」と言います。私たちが祈るときにもっている姿勢は、ひょっとすると、そのようなものかも知れません。「神さま、どうぞ私のこの願いの通りにしてください！」と、それが叶えられないと私たちは神の前に不平不満を並べませんか？「どうして叶えてくれないのですか？」と。だれが主人なのでしょう？だれがしもべなのでしょう？私たちは祈りを通して、ランプを擦って、神が私たちの前に現われて「あなたの願い事を三つ叶えましょう。」と言うのを待っているのです。その時に私たちは「三つだけでなく、そんなけちくさいことを言わないで五つでも七つでも十でも二十でも叶えてください。」と言います。

でも、それは正しい態度で為されている祈りでは全くありません。そして、著者はそのような祈りはしなかったのです。彼は自分が主の前にあって単なる奴隷でしかないことを知っていたのです。そして、何よりも大切なことは神のみことばを守ることであると、よく分かっていたのです。もし、神の恵み深い御手によって彼のいのちが守られたとするなら、彼は神のみことばを守ることによって豊かな生涯を歩んで行くと言っているのです。「私はそれがしたい！私はそれしか考えていない。」と、彼はそのことに専心していたのです。皆さん、最後にそのような祈りをしたのはいつですか？皆さんは自分が神のしもべであることを確かに理解し、神のみことばを守ることに専心し、そのことに献身して祈っていますか？皆さんはこの地上に神が皆さんにいのちを与えてくださる限り、「あなたのみことばを守って生きて行きます」と祈っていますか？

私たちはよく賛美します。「あなたのみことばはわが足のともしび、わが道の光です。」と。そのように生きていますか？私たちは本当に心から「あなたのみことばが照らすその道を、真っ直ぐに歩んで行くことに私は専心しています。」と言うことが出来ますか？言っていますか？真の信徒は、自らが神の奴隷であることを知っているゆえに、自分自身の生涯を神の命令を守ることに熱心に歩んで行こうとします。皆さん、私たちは神の奴隷なのです。奴隷である以上、私たちは神が要求することに対して、「ノー」と言うことはないのです。雇われているしもべなら「すみませんが、その部分はお金をもらっていないので出来ません。」と言えます。でも、奴隷として神の所有物とされているとするなら、私たちは神が命じることに対して、「はい、分かりました。私はそれを行なっていきます。」と言う以外に、本来、神に言うべきことばはないのです。神のみことばを何よりも重要視し、それに専心して行くことこそが、私たちの生きなければいけない生き方であり、それがまさに、私たちが様々な困難の中にあって、勝利を得て生きて行くための最初の鍵なのです。

皆さん、神が「いつも喜んでいなさい」と命じているのを知っておられますね？神の奴隷はそれに対して何と答えるのでしょう？私たちがよく言うことは「神さま、すみません。こんな状況ではとても喜ぶことはできません！」ではないですか？でも、もし、私たちが本当に神の奴隷として神と神のみことばに対して専心し、献身しているとするなら、私たちが言うことは「分かりました、神さま。とても喜べそうにないけれど、私はこの状況の中で喜ぶことを決心します。」です。「そうします。あなたがそのように求めているからです。」と。

私たちは神に対して希望を持つようにと言われています。でも、私たちが毎日の生活を送って行くとき、どう考えてもここには希望がないと思われるような状況に接することがあります。どうしますか？絶望しますか？落胆して、上を見上げるのを止めて、下ばかり見て閉じこもって生きて行きますか？神に喜ばれる生き方をする人たちはどのようにしますか？「私は希望が見えない状況の中で、神に希望を持ちます。」と決心するのです。皆さん、そのように祈りますか？「主よ、あなたのしもべを豊かにあしらってください。そうすれば、私は生き、あなたのみことばを守るようになるから。」と。

２．神と神のみことばが私たちの願望である　　１８節

二番目の祈りは１８節に見るのですが、ここでも１７節と同じように、日本語の聖書には願い事が二つあるかのように書かれていますが、ここにも一つの願いとその目的、もしくは、結果が記されています。訳すと「私の目を開いてください。そうすれば、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようになるからです。」。

１）著者の祈り

ここで著者が願っていることは、この詩篇の中で彼が何度も繰り返して教えることです。それは、神の助けがなければ私たちはみことばを理解することが出来ないという事実です。これは１２節でもうすでに教えていました。「あなたのおきてを私に教えてください」と彼は願っています。このことばは何度も繰り返してこの詩篇の中に出て来ます。私たちはパウロのことばからこの事実をよく知っています。Ⅰコリント２：１４にはこのように書かれています。**「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。」**、生まれながらの人間は神のみことばを理解することができない、神の助けなしではそれを知ることができないと言うのです。Ⅱコリント４：４には**「そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。」**と記されています。未信者の目におおいがかかっているのです。まさに、そのことを著者は教えるのです。「どうぞ、目を開いてください。」と、この**「目を開く」**ということばは「取り除く」という意味をもつことばです。

民数記２２章３１節でこのことばが使われています。皆さん、バラムの話はご存じですか？バラムという預言者がろばに乗って、バラクという王のもとに行こうとします。そのときに、ろばが急に立ち止まるのです。押しても引いても動かないのです。そのやりとりがしばらく続いた後、怒ったバラムがろばをむち打とうとするときに、神がバラムの目を開くのです。そこには剣を抜いて手に持って、今にも襲いかかろうとしている天使の姿があったのです。**「そのとき、主がバラムの目のおおいを除かれたので、彼は主の使いが抜き身の剣を手に持って道に立ちふさがっているのを見た。彼はひざまずき、伏し拝んだ。」**。私たちの目はバラムの目のようなものです。見えないのです。神の真理を正しく理解することがないのです。それゆえに、私たちは神によってこの目を開いてもらわないといけないのです。そして、それこそがこの詩篇の著者が願っていることなのです。「私がみことばを学ぶに当たって、みことばを読むに当たって、それに思いを巡らすに当たって、どうぞ、私が完全な視力をもってこのみことばを理解し、読むことができるようにしてください。」と。

私たちは神の前に出るに当たって、みことばを読むに当たって、この祈りをしなければいけません。「どうぞ、私の目を開いてください。あなたのみことばを教えてください。」と、それこそが私たちが聖書を開くに当たって、常に言い続けていることでなければいけないのです。私たちにはメガネが必要なのです。霊的なメガネ、神が与えてくださるメガネです。メガネをかけずにこの本を読むと、そこに何か書いてあるのは分かるのですが、いつもぼやけているのです。はっきりと見えないので、私たちは何が起こっているのかよく分からないままに何となくページだけをめくるのです。この著者は「目を開いてください。完璧な視力を与えてください。」と言います。なぜ、そのような視力を求めるのでしょう？みことばを学ぶに当たって、なぜ、分かるようにしてくださいと言うのでしょう？それが後半部分に書かれています。

２）目的

「そうすれば、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようになるからです。」、ここにある**「奇しいこと」**とは、何か特別なすばらしい事柄というよりも、この詩篇１１９篇の中に書かれている様々な事柄、文脈と照らし合わせて考える時に、ある注解者が私たちに教えるように、これは著者がこのみことばを通して具体的に示されている真理に、しっかりと目を留めることができるようにという祈りであると考えることができると思います。私たちは単に、みことばを追うだけなら、余りよく理解していないことがあります。大きな概念は掴んでいるのですが、非常に単純かも知れないけれども、具体的な私たちの毎日の生活において非常に大切なすばらしい真理に目を向けていないことがたくさんあるのです。

例えば、私たちはみな「神は全能の方だ」と言います。皆さん、神が全能な方だと思っているのなら、私たちが絶対に口にするべきでないことは「私は変わることができません」ということばです。神は変わることができないあなたを変えることができる方なのです。全能な方だから。私たちがもし「このことだけは無理です。」と言っていることであっても、全能なる神に委ねるなら、神は私たちを変えることができるのです。私たちは神学的な概念は分かったとしても、それを具体的に毎日の生活に生かすこ

とが非常に苦手ではないですか？見えていないのです。視力検査をするときに、一番大きな文字はよく見えるのですが、文字が小さくなると段々見えなくなります。だから、私たちは言います。「神さま、私の生涯の小さな所まであなたのみことばの真理がしっかり行き渡るように、私の目を開いてください。」と。

皆さん、私たちは聖書の理解以上に成熟することはありません。ローソン先生はこのように言います。「霊的な健全さ、クリスチャンの生涯における霊的な健全さというのは、私たちが神のみことばに対してもっている真理の理解度に基づく。」と。その通りだと思います。私たちの霊的な生涯が、より深くより高いものになって行くためには、私たちはみことばの真理をより深くより高く知らないといけないのです。皆さんは、この聖書を書かれた神を知りたいと願い求めていますか？この神のみことばは海のようなものです。そこには海岸があります。その砂浜では生まれたばかりの赤子が喜び楽しんでその水で遊ぶことができます。でも同時に、神のみことばは、どんなに大きく深い海溝よりも深くて、最も成熟していると言われている信徒であっても、すばらしい知識をもっていると言われる神学者であっても、その深みの極みまで手をつけるどころが、見ることすらできないほど深いのです。

皆さん、どこで泳ぎたいですか？どこまで行くのですか？神の真理の深遠さに溺れたくありませんか？そこで益々神のすばらしさを知って、それが自分の生涯に豊かに反映されて生きて行きたいと願いませんか？皆さん、よく考えてください。この著者は「あなたに専心しています」と言いました。「あなたのみことばに私は献身しています。それを守って行きたくてしようがないのです。」と言います。だから、知らなければいけないのです。みことばを理解していないといけないのです。みことばの真理をしっかりと自分のものとして生きて行こうとしなければいけないのです。これが二番目の鍵です。

もし、私たちが人生の様々な問題の中にあって、喜びに満ちて平安に満たされて生きて行くことを考えるなら、私たちは神を慕い求めて、その神にのみに専心して生きるだけでなく、その神が教えるみことばを願い求めて行かなければいけないのです。著者が求めたのは、面白おかしい人生を生きることではありませんでした。彼が求めたことは、このような危険から解放されて楽な生涯を生きたいではなかったのです。彼が何よりも求めたのは「あなたのみことばを知りたい。」ということです。皆さん、そのような祈りをしていますか？そのような態度をもって生きていますか？

３．神とみことばが私たちが生きて行く方向である　　１９－２１節

ここで三番目の祈り、願いが記されています。１９節**「私は地では旅人です。あなたの仰せを私に隠さないでください。」**と著者は祈ります。そして、２０，２１節はそのことばの説明です。

１）著者の祈り　　１９節

１９節の冒頭で、著者は**「私は地では旅人です。」**と言っています。この世にあって私は旅をしているような者、旅人であり、もしくは、この地にあって私は異国人であると、そのように訳すことができる表現が使われています。「この世」と訳すのか「この場所、地」と訳すのか、どちらにしても、著者が言わんとしていることは余り変わりません。本質的なことは変わっていないのです。「私はこの世において、自宅にいる訳ではない、家にいない、よそ者です。」ということです。なぜ、彼がそのようなことを言うかというと、彼はパウロが言ったことと同じことを知っていたからです。ピリピ３：２０**「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」**、「私の国籍はこの世ではなくて天にある」ということを知っていたのです。

アブラハムやその子孫たちが約束の地にあって寄留者として生き、彼らが文句も不平も言わずにその生活を送り続けたのは、彼らが神が建てられた神の都を待ち望んでいたからです。そのことはヘブル人への手紙１１章に記されています。１１：９－１０**「信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。:10 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。」**、同じように、この著者は知っていたのです。「私は寄留者です。私は旅人です。私は在留異国人です。この地は私の住まいではありません。」と、そのことをよく知っていたから彼は祈ったのです。**「あなたの仰せを私に隠さないでください。」**と。

なぜ、このように祈ったのでしょう？彼はこの世の人物ではなかったからです。この世では旅人でしかなく、この世は自分の家ではなかったのです。それゆえに、この世が与える様々な決まりや様々な原則、様々な指示は、彼が生きる生き方とは異なるものだったのです。彼はこの世が求める生き方をすることができなかった、いや、するべきでなかったのです。彼はこの世のものではなかったからです。どの決まりで生きるべきですか？神の決まりです。だから、彼は願うのです。「どうぞ、あなたの命令＝仰せとは命令と訳すことが出来ます＝を私から隠さないでください。どうぞ、それを常に私の前に明らかにしておいてください。あなたが求める生き方を私がしっかりと行なって行くことができるように、

あなたの命令を私から隠すことはしないでください。」と。
　この命令は、私たちがこの命令をしっかりと守って生きるなら、神のもとへと行く道を私たちに明確に示してくれるものだからです。この命令は、私たちに神の家がどこにあるのかを教えたのです。この命令を読むときに、この命令を見る時に、この命令を知るときに、私たちは神の家の香りを嗅ぐことができたのです。だから、著者は「私からそれを隠さないでください。私は旅人でしかなく、この世では行く道ははっきりしていないから、あなたがその道を示してくれなかったら、私は進んで行くことができない。」と言うのです。
２）神に対する熱望　　２０節
　彼はさらに続けます。**「私のたましいは、いつもあなたのさばきに慕い、砕かれています。」**と。ここで著者が言わんとしていることは、非常に具体的な事柄です。この**「砕く」**ということばは「粉々にする」という意味があって、旧約聖書の中でも２回しか使われていない非常に珍しいことばです。このことばは、重たい物によって押し潰されている、そのような状態を現わします。漬け物をつけるときに石を置きます。石を置かないと漬け物はちゃんと漬かりません。それがこの著者が言わんとすることです。私たちの上に大きな重いものがあるのです。それはあなたのさばきを慕うその思い、さばきに対する熱望です。その熱望が私たちの上に余りにも大きく乗っているゆえに、私たちのたましいはそれによって押し潰されてしまって、他に何も残っていないと言うのです。他の願望や他の思いは、すべてそれによって押し潰されて粉々にされているゆえに、私が願っていることはあなたのさばきを慕う思いしかないと言うのです。
　私たちの心にあるあらゆる事柄は、神に対する熱望のゆえに押し潰され、そこから追い出されてしまったのです。彼が求めていたのは神のさばきでした。神のみことばを知りたいという願いに彼の心は完全に満たされていました。それは単に、神のみことばが幾千もの金や銀よりもすばらしいということを彼が知っていただけでなく、このみことばは彼がどのようにこの地上にあって生きて行くべきなのかを彼自身にはっきりと示したからです。詩篇１１９：１０**「私は心を尽くしてあなたを尋ね求めています。どうか私が、あなたの仰せから迷い出ないようにしてください。」**、１１９：７２**「あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。」**。「隠さないでください。」と彼は言います。そして、彼はその思いをいつももっていたのです。絶えることなく、ありとあらゆる時に。
３）彼の敵　　２１節
　彼はこの三番目の祈りを２１節のことばで締めくくるのですが、そこで私たちは彼の敵に初めて遭遇します。２１節**「あなたは、あなたの仰せから迷い出る高ぶる者、のろわるべき者をお叱りになります。」**、**「お叱りになります。」**ということばを見ると、何となく、厳しい表現に聞こえないのですが「戒める」ということばが使われています。神の警告です。神のさばきのことです。この敵はどのような特徴をもっているのか、そのことが２１節に記されているのですが、彼らは**「高ぶる者」**、**「のろわるべき者」**でした。そして、彼らは**「神の仰せから迷い出る」**、その道を行かない者だったのです。これらの三つの特徴を合わせて考えるなら、彼らは余りにも高慢であるゆえに、神のみことばなどどうでもいいと言っている人たちなのです。「私の考えの方が正しいから、神が何と言おうと、私はそれに対して一切関心を払う必要はありません。」と言っている人たちです。「神さまのみことばなんてばからしい」と、そのように考えている人たちです。それゆえに、彼らは主のおしえに逆らい、そこから迷い出て、神からののろいを受ける者たちなのです。
　彼らに対して神は戒めをお与えになります。天から神の雷の警笛が鳴り響くのです。ある意味、この詩篇の著者はよく分かっていたのでしょう。パウロがローマ人への手紙８章３１節で**「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」**と言うように、彼はそのことを良く知っていたのです。もし、私たちが神のみことばの通りに生きて行くなら、みことばの道に沿って私たちが生活をして行くなら、神は私とともに歩んでくださり、神が私のために働きを成してくださるゆえに、たとえ、どのような人物が私に敵対しようとも私は恐れる必要がないと、著者はよく分かっていたのです。彼の責任は敵を滅ぼすことではなくて、神のみことばを守ることだったのです。戦いは神のものだったのです。私たちのものではないのです。彼はそのことをよく分かっていたゆえに、ただ一心に神の道を進んで行く、その方向を求め続けることを願って止まなかったのです。
　この世にあって寄留者であり旅人である私たちは、同じように、神が示す道に進んで行くことに熱心でなければいけません。私たちはこの世に目を持つべきでないのです。今生きているこの世界は居心地が悪い所なのです。私たちの家ではないのです。心から安らげる場所ではないのです。唯一、私たちがこの世にあって安らぎを見出すことができるのは、神のみことばによって示されている道を歩むときだけです。なぜなら、そこに私たちの家があるから、そこで私たちは家の暖かさを感じることができるか

ら、そこには私たちが待ちに待っているすばらしい食事の香りが香って来るからです。
　皆さん、これが三番目の鍵です。いろいろな問題があるときに、私たちは神の方向に行くことに目を向けるよりも、その問題に直接的に目を向けることがありませんか？敵に囲まれているときに、私たちはみことばに目を向けるよりも敵に目を向けませんか？著者は言うのです。「私のたましいはいつも、あなたのさばきに対する熱望で砕かれています。どうか、あなたの仰せを私に隠さないでください。」と、そのようにして行くときに、私たちは神の道を歩むようになるのです。神の道を進んで行こうとします。それこそが私たちが様々な困難に打ち勝って行く秘訣です。

４．神とそのみことばが私たちの守りである　　２２－２４節

１）取り去って　　２２節

　２２節に祈りが記されています。**「どうか、私から、そしりとさげすみとを取り去ってください。」**、この**「取り去る」**ということばは「転がす」という意味があります。実際に、旧約聖書では、井戸を覆うために岩を転がしたり、洞穴を塞ぐために岩を転がすという意味で使われています。著者がここで敢えてこのことばを使って表現することは、彼自身が敵から受けているそしりとさげすみという、非常に大きな重荷として自分の上にのしかかっている岩を「神さま、どうぞ転がしてください。横にやってください。取り除いてください。」ということです。**「そしりとさげすみ」**とは、特に、ことばによってもたらされる様々な攻撃です。ときに、それは具体的に肉体的な攻撃となって現われることもあります。でも、ここで言わんとしていることは、この著者が敵から嘲られ、笑われ、そして、恥を着せられていたことです。そして、彼は神に祈るのです。「どうぞ、そのような重荷を、そのような恥を私から取り除いてください。」と。この祈りは、彼がもっていた神のみことばに対する献身に基づいていたことを、私たちは知ることができます。２２節の終わりに**「私はあなたのさとしを守っているからです。」**と言っています。つまり、神のみことばを守っているこの著者は、そして、それを心からすることを神の前に誓っている著者は、神からの守りを期待しながら祈ることができるのです。
　私たちが神からの守りを求めて祈るときは、ひょっとしたら随分違う態度で祈っているかも知れません。普段は、全く神のことを考えないで生きているのに、何か困ったことがあったとき、私たちは神の方を向いて「神さま、何とかしてください。お願いします。」と言うのです。皆さん、自分のことを考えてみてください。もし、皆さんのお知り合いのだれかが、普段は全く皆さんのことを蔑んでいるのに、自分が困ったときだけ頼りにしてやって来たらどうですか？また、皆さんがそのような相手にお願いをするために行かなければならない立場だったらどうですか？普段蔑んでいる人たちにお願いしなければいけないときに期待できますか？良い答えが返ってくるだろうと１００％の確信をもって行くことができますか？この著者は神に対して献身していたのです。「私はみことばを守っているのです。だから、主よ、助けてください。」と。

２）危険　　２３節

　２３節を見ると、再び敵が紹介されます。**「たとい君主たちが座して、私に敵対して語り合ってもあなたのしもべはあなたのおきてに思いを潜めます。」**、この様な危険を彼にもたらしていたのは**「君主たち」**だと言うのです。**「君主たち」**とは「王子たち、支配者たち」と訳すことが出来ることばです。単数ではなく複数であることに注目してください。多くの人たち、国のリーダーたちがこの著者に対して悪事を企んでいたのです。私に敵対して語り合っていたのです。彼らは相談してこの人物を陥れようとしていたのです。彼に恥をかかせ、彼に悪を働き、彼を嘲笑おうとしていたのです。
　皆さん、このような状況の時に皆さんならどうしますか？たった一人の人でも、私に逆らう人がいて何か悪い事をしようとしていることを知ったなら、もの凄くナーバスになるではないですか？「どうしたらいいのだろう？」と思い悩みます。この著者は多くの国のリーダーたちによってこの様に企てられていたのです。私たちがそのような状況の中で取る態度は「恐れ」であったり、「怒り」であるかもしれません。恐れてどうしようもなくなって、縮こまってしまって何もできなくなってしまったり、もしくは、そのように企てる者たちに対して激しい怒りを燃やして、反撃に出ようとするかも知れません。
　でも、この人物の応答を見てください。**「…あなたのしもべはあなたのおきてに思いを潜めます。」**、思い巡らしますと言います。神のみことばの中に自分の身を置く、それに思いを巡らしてそれだけを考えると言うのです。この著者は、君主たちが彼の上にどのようなことを企てていようとも「私には関係ない」と言ったのです。なぜなら、彼が唯一気にかけていたことは、彼の主人である神が、彼に対して何を計画しているのかだったのです。だから、また「私は」ではなく**「あなたのしもべは」**ということばを使っています。著者はこのように使うことによって、１７節で言ったことを私たちに彷彿させるのです。「豊かにあしらってください。そうすれば、私は生き、あなたのことばを守るようになるからです。」と、生きるかどうか、守れるかどうかは、神の主権によって決められるのです。神のみこころのままに

それがなされるのです。敵がいようと敵がいないとしても、神はそのような敵に打ち勝つことができるすばらしい力をもって、最善を図る方なのです。
　だから、この人物は主の前に自分は従順に従うべき奴隷であることをもう一度思い起こして、「よくあしらってくださるなら、私は生きて、あなたのみことばを守って生きるのだから、今からそのみことばに私は思いを留めます。」と言うのです。皆さん、これが正しい応答だと思いませんか？神がすべてをご存じで、神が彼に対して最善の働きを成してくださることを知っているゆえに、神が望まれるなら、どのような危険からも神が守ってくださることを理解して、彼はただただ神のみことばに思いを寄せるのです。
３）結果
　終わり方がすばらしいと思いませんか？２４節**「まことに、あなたのさとしは私の喜び、…」**と、これはまさに、彼がこのようにみことばに思いを巡らせたときの結果でしょう。このような危険な状態の中で、困難を抱えている状況にあって、神のみこころに思いを寄せていったときに、私たちの心は喜びで満たされるのです。皆さん、ご存じでしたか？私たちがどんな困難に遭遇しようとも、どのような危険に会おうとも、どのような状況の中に置かれたとしても、神のみことばはその中にあって私たちに平安と喜びを与えるのに十分なものです。私たちはそのことをよく覚えておかなければいけないのです。
　私たちクリスチャンがもっているすばらしい特権は、まさにそれです。どんな時でも神が与えてくださる超自然的な、世の中の人が全く理解出来ない平安と喜びに、私自身が満ちることが出来るということです。皆さんも経験があるだろうと思います。そのような信仰者たちを皆さんもご覧になっただろうと思います。そして、それはこの神のみことばが成す働きなのです。聖霊が、このみことばを通して私たちの内に為してくださる働きなのです。御霊の実とは「愛、喜び、平安、寛容、親切…」と続きます。聖霊が働いたなら喜べるのです。みことばを通して、私たちはその喜びを理解出来るのです。
　この詩篇の著者はそのことを何度も繰り返して私たちに教えます。たとえば、詩篇１１９：５０には**「これこそ悩みのときの私の慰め。まことに、みことばは私を生かします。」**と書かれています。みことばこそが悩みのときの私の慰めなのです。９２節には**「もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでしょう。」**とあります。神は、単に、私たちから様々な問題を取り除いてくださるだけではないのです。私たちのうちにすばらしい喜びと平安を与えてくださるのです。真っ暗闇の中で光り輝く希望を与えてくださるのです。だから、１４３節には**「苦難と窮乏とが私に襲いかかっています。しかしあなたの仰せは、私の喜びです。」**と記されているのです。
　そして、彼は最後に、このみことばは**「私の相談相手です。」**と言います。皆さんはだれに相談しますか？問題を抱えたとき、だれを頼りにし、だれのことばに信頼しますか？皆さん、ご存じですか？神以上に、あなたの問題をよく知っている方はいないということ、神以上に、知恵をもってあなたの問題の解決を示してくださる方はいないことを。それなのに、私たちはどこに相談に行くのでしょう？私たちはみことばにこそその問題の解決を求めるべきです。聖書は言います。この著者がこのように言います。「このみことばは、まるで私の親しい友人のようだ。彼のもとに行ったら、私は常に最善の助言を得ることができる。」と。それこそが神が私たちに与えてくださったこの聖書なのです。
　皆さん、ここに書かれていることはおとぎ話ではありません。現実のことです。この著者だけに起こったことではありません。また、特別にすばらしい信仰をもった信徒にだけ起こることでもありません。このように言います。イザヤ書４０：８**「草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことばは永遠に立つ。」**と。変わることなく、この働きは続くのです。今も、私たちの人生に、神はみことばを通してこの働きを続けるのです。問題は、私たちがそれに沿って生きるかどうかということです。神のみことばは私たちを守ることができます。詩篇の著者はそのことをよく知って、そのように祈ったのです。
　この詩篇の第３区分、ギメルの箇所を学びつつ、私はずっとダニエルのことを考えていました。預言者ダニエルは、ここに出て来る状況と同じ状況を経験していたと考えることができます。余りにも、それが似通っているゆえに、ある注解者は、実は、この詩篇を書いたのはダニエルではないかと言います。そう思ってもおかしくありません。ダニエル書６章で、ダニエルがペルシャの王とその支配者たちによって様々な企てをされる記事があります。彼らは何とかダニエルを貶めようといろいろな計画を立てるのですが、何を計画しても上手く行かないので、彼らはついに、相談してダリヨス王の所に行きます。そして、このような命令をさせるのです。「３０日間、王である私以外の何にも祈ってはいけない。」と。それを聞いたダニエルはどうしましたか？不安になって「もう駄目だ」と部屋に閉じこもったでしょうか？あるいは、怒り猛って敵を滅ぼそうと剣を取って立ち上がりましたか？王の所に文句を言いに行きましたか？いいえ、彼は家に帰っていつものように祈りました。ダニエルはまさに、この詩篇の著者が言っていることを実践して生きていたのです。なぜなら、彼は自分が「神のしもべ」であることを

よく分かっていたからです。彼が気にかけたことは、周りがどのような状況であるのかでもなく、だれが何を言うのかでもなく、ただ、神が自分に求めることを「はい、分かりました」と言って実践して行くことだったのです。彼の人生には喜びがあったでしょう。彼の人生には平安があったでしょう。彼の人生には希望があったでしょう。ダニエルの三人の友人たちを思い出しませんか？炉に投げ入れられる状況にあって、助けられたとしても助けられなかったとしても「私たちには関係ありません。神の求めることをするだけです。」と言いました。

私たちは、神の前に敬虔な人物の祈りを見ました。彼は言います。「この世にあって、私たちは喜びに満たされて、平安に満たされて、勝利者として生きて行くことができる。様々な問題に思い悩み、落ち込み、それに縛られて何もできないままに惨めに生きる必要はない。」と。そのために、私たちは神に専心し、神を心から願い求め、神の道を真っしぐらに進み、神の守りを期待して生きて行くことができるのです。それをして行くときに、私たちの心には常に喜びが溢れてくることを教えてくれるのです。このように祈りたくありませんか？このようにして生きて行きたいと思われませんか？